

青森県障害児教育史 —— 青森盲啞学校の設立と戦前における展開 ——

History of the Education for Handicapped Children in Aomori Prefecture :
Establishment and Development of Aomori School for the Blind and Dumb.

安 藤 房 治*
Fusaji ANDŌ

論文要旨

青森盲啞学校は、明治末期から昭和初期にかけて県内で組織された社会事業の一つとして、献身的な盲人によって創設された。青森盲啞学校の前身である盲人教育所は、盲人保護に理解ある一部の資産家、政治家の支持、援助を得ながら私立青森盲啞学校として発展することができた。盲啞学校の県立への移管は、県内での盲啞教育への理解の広がり、一部の資産家、政治家の運動、さらには盲学校及び聾啞学校令にもとづく全国的な盲聾学校の県立移管化の動きが後ろ盾となって可能となった。

県立移管後は、私立校時代に比較すると経営面での困難が解消し、学科や教科も充実し、多数の卒業生を世に出し、青森県の県都に位置する盲聾啞児教育の拠点として発展を見せた。

はじめに

筆者は、青森県における障害児教育史研究がほとんど手つかずの状況にあることから、これまで、八戸盲啞学校の設立に至るまでの歴史的背景を解明し¹⁾、さらに大正期から昭和戦前期までの青森県における障害者の生活実態を明らかにし、青森盲啞学校設立の社会的・歴史的背景に言及した²⁾。

青森県においては、明治期後半において資本主義の発展に伴う農業人口の減少と都市部への流入、その結果都市部では無業者、浮浪者が増大した。青森県における特殊事情としては相次ぐ冷害による凶作の結果としての農業生産力の急激な低下がそうした現象に一層拍車をかけた。生み出された無業者、浮浪者の中に生産の担い手となるのが困難な障害者、障害児が存在していた。たとえば、以下のような記述にもそのことが伺える。

「本県に於ける盲聾啞者其数実に尠しとせず試みに街頭に立たば便りなき盲者啞児を見ると日に幾人に止らざるべく若し夫れ祭祀時神社仏閣の境内に入らんか彼等ら一群其処に彼処に憐みを乞ふの状誰か惻隱の心起さざる者あらんや」³⁾

明治末期より昭和初期にかけて、青森県内には社会事業が相次いで組織された⁴⁾。青森盲啞学校の前身である青森盲人教育所もこれら社会事業の一環としての「盲啞保護事業」の一つとして設立された。創設者西蓮寺幸三郎は「盲人の多数なるを痛感し奮然身を挺して盲児教育事

* 弘前大学教育学部心身障害学科教室

Department of Education for Handicapped Children, Faculty of Education, Hirosaki University

業に当たらんことを決意」⁵⁾して、事業に身を投じた。

本稿では、青森盲啞学校の設立および戦前における展開について論及する。

1. 青森盲人教育所創設および創設者

西蓮寺は、茨城県茨城町にて1903（明治36）年に生まれた。小学校入学前に失明し、水戸盲学校に入学、その後東京盲学校師範科鍼按科に進学し、1924（大正13）年3月、同科を卒業した⁶⁾。同師範部で青森出身の奈良孝治と知り合い、青森市に盲学校を建設する夢を共有した⁷⁾。西蓮寺は師範部卒業後、北海道旭川盲学校教師として発令されたが、一年後青森に奈良を訪ねた。

「（西蓮寺は）大正十四年八月十八日、奈良の住む青森市へやってきました。しかし、現実はいきびしく、その時、奈良はすでに病気で死亡していたのです。奈良の遺族は涙のうちに彼を迎えました。協力者を失った盲人教師幸三郎はガッカリしましたが、よしひとりふたりぶんやろうと決意をあらたにし、元気を出して、青森市に盲学校を開くために努力をはじめました。」⁸⁾

1925（大正14）年10月15日、西蓮寺は青森市内相馬リン方二階の一室を借用し、生徒2名で指導を開始した。これが青森盲人教育所の創設である。「最初の生徒は二人でした。午前中は、点字と盲人用そろばんの勉強、午後は、県庁や市役所へ出かけ、県立盲学校設立の運動をしました。」⁹⁾と、書かれているように、創設時は午前中に授業を行い、午後は経営のために働いた。

創設間もない青森盲人教育所を山口ちせが訪ねた。山口は、青森出身の東京の教師で、「故郷にいるたくさんの不具な子の力になって上げたい」¹⁰⁾という思いで帰郷していた。

「ちせさんは、ようやく訪ねあてたその家の前に立って、ちょっと息をのんだ。途みち尋ねても容易に分からなかったのも道理、それは学校といっても名のみで、普通の小さな二階家をそのままあてたものであった。ちせさんは、しばしためらった後、思いきって案内を乞うた。でできたのは、二十七、八の盲目の青年、それがこの家の主でもあり、ただひとりの教師でもある西蓮寺幸三郎その人であった。招じられて、ちせさんが二階に上がってみるとそこが教室にあてられているらしく、ふたりは盲目、ひとりは啞の男の子が、異様な叫び声をあげて騒いでいた。」¹¹⁾

山口は、西蓮寺の仕事を手伝うことになった。「それから毎日、ちせさんは、西蓮寺先生の『盲教育所』と名づけた私塾にかよった。生徒の数はまだ少なかったが、先生の西蓮寺氏をはじめ、子どもたちはみんな目や口の不自由なものばかり、その世話から洗濯、食事、はては便所の掃除まで、いっさいこまかく気を配ってやる。その上で、西蓮寺先生を相手に盲啞教育についての新しい研究や、新しい学校建設のプランなどを相談する」¹²⁾という生活が始まった。

1926（大正15）年、「時の本県社会主事補西村謙吾氏の尽力により青森市浪打今井武一氏経営にかかる青森同情園の一室を無料借用移転」¹³⁾した。生徒は12、3名となり、初等科、中等科の二科がおかれた¹⁴⁾。中等科の修業年限は四年で、教授していた科目は「職業科で鍼術、灸術、按摩術、マッサージ術を教え其の補助科目として修身、国語、算術、博物、物理、化学」であった。初等部の修業年限は六年であり、その教授科目は「尋常小学校程度で修身、国語、算術、国史、地理、理科等」であった¹⁵⁾。

盲人教育所の経営・維持は楽ではなく、西蓮寺は、盲教育に対する啓蒙、理解者を求めて「午

前は授業、午後は官庁及び市内の名士を訪問され、盲教育の必要性を説かれ、日々血みどろの努力¹⁶⁾を続けた。また、1927（昭和2）年夏には「生徒達が盲教育普及の為に、夜間大きな角燈ろうをかつぎ、市内をねり歩¹⁷⁾いたり、町田則文東京盲学校長の講演会を行ったりした。市民の理解、関心も徐々に深まり、1927（昭和2）年7月26日には、日赤青森支部において、藤林源右衛門¹⁸⁾、等市内の有志十余名が参加し「青森盲人教育所維持会」を設立した。

盲人教育所は、1927（昭和2）年11月29日に、盲学校と改称した。「市内浦町城戸利策氏の好意により同氏附近に校舎を新築し爾来盲人十五人収容し専心教育に従事しつつある¹⁹⁾」状況となった。

表1. 青森盲学校の1928（昭和3）年度収支

総収入高	1,844円73銭
(内訳)	
青森盲学校維持会後援費	980円50銭
寄付金	298円22銭
設立者負担金(西蓮寺氏)	465円04銭
県共済会補助金	100円00銭
繰越金	97円00銭
総支出高	1,844円73銭
(内訳)	
教員給	96円00銭
小使給	180円00銭
校医手当	60円00銭
備品費	79円20銭
図書費	32円81銭
筆墨費	4円43銭
印刷費	46円55銭
修繕費	4円67銭
旅費	37円50銭
電灯費	18円93銭
通信費	4円29銭
校舎借家料	266円00銭
薪炭費	132円50銭
雑費	22円85銭

（「東奥日報」昭和4年11月29日付、青森県教育史、第4巻、641頁より作成。内訳と総額の数値が合致しないが、原資料通りとした。）

表1は、1928（昭和3）年度の収支である。当時の国民の年収は800～1000円程であり²⁰⁾、学校の年間運営費1844円は、個人の年収と比較しても少額である。また、1928（昭和3）年度は、教員は西蓮寺と山口の二名であったが、教員給96円（年額）は二教員にとってはほとんど無給に近かった。そればかりか、当時生徒でもありまた書記でもあった根川貞美が「経営費としても之ぞときまったものもなく、唯先生の放課後に得る治療の報酬ぐらいのものでした²¹⁾」と述べており、また「創設者負担金」として465円04銭を西蓮寺が負担していた（表1）ように、西蓮寺の収入を学校運営費に充ててさえた。西蓮寺は「開校以来、資金面と校舎の問題で、苦闘、青森県の盲人教育のため努力したが、過労のため昭和四年一〇月死去した²²⁾」。山口は「生徒の募集から指導、学校経営の何からなにまで切り廻²³⁾すことになった。こうした山口の「姿を伝え聞いて、ここにひとりの同情者が現れた。青森市出身で、東京盲啞学校を卒業した中島健次郎氏だった。中島氏も盲人であったが、

西蓮寺先生の残した仕事、ちせさんの努力に深い理解をもって力を貸してくれること²⁴⁾になり、1929（昭和4）年11月1日付けで中島が経営の任にあたることになった。

学校運営の一端を経済的にも支えていた西蓮寺が死去したことにより、財政状況は一層悪化した。盲啞学校経営を維持するには後援体制を強化する以外にはなかった。すなわち、「藤林源衛門氏専ら世話役となり非常の苦心を払ひつゝあるが経費不足を来し前途不安の状況であるから有志者に対し毎月一口五十銭一ケ年間の義捐を希望し居る²⁵⁾」という状態であったので、1929（昭和4）年11月27日、青森盲学校維持会は「協議の結果従来の維持会は十一月分の集金を以て一先づ解散し、新たに十二月より一口五十銭、二口一円の二種の会費制度による会員を募り、盲学校維持後援会を設けて後援する²⁶⁾」ことになった。盲学校の経済的な支援は、このように後援会を通しての私的な募金を中心としたものであったが、1928（昭和3）年10月1日には青森県共済会から（2回継続）、1929（昭和4）年7月30日には青森市から（毎年継続）それ

ぞれ補助金の交付があった²⁷⁾。

2. 私立および県立盲啞学校時代

1) 私立青森盲啞学校の認可

1931（昭和6）年5月10日、北山一郎²⁸⁾、藤林ら8名が設立者となり、青森盲啞学校と改称すると共に、設立認可を文部省に申請した。同年8月3日、設立の認可が得られ、同年12月8日、一民間人渡辺佐助の寄贈により独立校舎に移転することができた。1934（昭和9）年2月26日、盲啞学校は鍼術灸術営業取締規則第一条（内務省令第11号）および按摩術営業取締規則第一条（内務省令第10号）による指定を受け、同年3月卒業生から効力を発した²⁹⁾ことによって、無試験検定で、鍼術、按摩、マッサージの免許を出すことができるようになった。「之によって盲生の将来が保証され、生徒の学習にも一段と力が入り同時に学校当局にも一層の励みと努力の意欲が盛り上がり、一路県立移管へと努力が続けられるのであった。」³⁰⁾

1923（大正12）年に制定された盲学校及聾啞学校令は、道府県に盲学校と聾啞学校を設置する義務を課していたが、学校の設置が困難な場合設置を7年間延期することを許していた（同令附則）。青森県も設置延期の認可を受けていたが、期限が迫り県としても対応を迫られた。県は、財政難を理由に「なるべく県立盲啞学校を設置したき希望なるも財源の関係上、私立学校を以て代用する」方針をとり、文部省の了承を得た³¹⁾。県の方針により、「八戸市並に青森市の有志は各々其立場から代用校として完備せざる学校の設立計画を急ぎ競争も従って激甚を加え」³²⁾る結果となった。青森盲啞学校は、1931（昭和6）年11月15日同校設立者代表でもある北山青森市長らの呼びかけで青森盲啞学校昇格記念演奏会を開催した。ここで、北山は「一日も早く県立学校としたい」という趣旨の講演を行った³³⁾。この間、八戸盲啞学校からは再三県議会への陳情、請願があった³⁴⁾が青森盲啞学校からのものはみられなかった。青森市長を中心とした青森盲啞学校の県立への移管の運動、八戸市および周辺の町村の協力も含めた八戸盲啞学校の運動の高まりによって、盲啞学校の県立移管の機は熟してきた。1935（昭和10）年県議会で、盲啞学校の現状、県立移管問題について次のようなやりとりがあった。

「（清藤唯七）学齢に達する児童の盲啞者は二千人あると聞く。東北六県中県立の盲啞学校のないのは青森県だけである。これらを県立学校で教育したい。予算関係で実現しないというが我々の調査では僅かばかりの費用ですむようである。」

「（高辻学務部長）盲啞学校は法令の規定によると昭和4年度以降は各府県に必ず県立校を造らねばならぬことになっている。」「来年度は県立に移管せず文部大臣の認可を得るつもりであるが、法の命ずるところでもあり、近い将来には速やかに実現する必要があると思っている。」³⁵⁾

1937（昭和12）年、青森盲啞学校は、八戸盲啞学校とともに県立移管を実現し、青森県における盲啞学校教育の基盤整備が進んだ。「県立となれば可及的速やかに内容の充実、設備の改善が行われると共に県下学齢児童中盲聾啞の不幸な児童を成るべく多数収容しなければならぬこととなり年々の盲聾啞学齢児童数から見て収容定員増加の要ある」ことから、県は定員増を文部省に認可申請した³⁶⁾。青森盲啞学校は、県立移管によって、当然ながら私立学校時代のような経営困難は解消された。たとえば、1938（昭和13）年度の経常費は6,034円であり、そのうち教職員費が4,853円を占める³⁷⁾など、10年前に見られたような、教員の個人的な奉仕を主体とし

た収支，経営は，県立移管によって著しく改善された。

2) 県立盲啞学校の教育内容

県立に移管後，盲啞学校の目的が「盲人及聾啞者に普通教育を施し其の生活に須要なる知識技能を授け特に国民道德の涵養に努むるを目的とす」³⁸⁾とされた。この文言は，1922（大正12）年制定・施行されていた盲学校及聾啞学校令の第1条の文言を踏襲したものであった³⁹⁾。教育方針は「我国家族制度の美風に則り学校を家庭的楽園と為し子弟の愛と父子の情とを渾然一致せしむ」とされ，「教育に関する勅語の御趣旨を奉戴し校風の確立を基調とし」，以下の項目が掲げられ，「盲人及聾啞者に普通教育を施すと共に其の生活に須要なる知識技能を授く」⁴⁰⁾こととされた。

- 一，国家社会に対する認識を深め，善良なる公民の養成に努め
- 一，感謝信仰の念を養い以て人生観の確立を期し
- 一，一般的養護に留意するは勿論五官の衛生に注意し進んで心身の錬磨体質の向上に努め
- 一，職業指導に特に意を用い
- 一，聾啞児童教育には口話教育に依り語彙の拡充日常会話の習熟を計り
- 一，児童心身諸能力の発展性を尊重し

県立移管後の教育方針は，上記の，教育方針の下に，朝会では「皇居遙拝」が行われ，毎月一回神社参拝が行われるなど，当時の学校教育の内容を支配していた天皇制国家主義教育理念を反映したものとなった。

盲部には初等部と中等部が設けられ，中等部には鍼按科，音楽科および別科が置かれ，聾啞部には，盲部と同じく初等部と中等部が設置され，中等部に工芸科と裁縫科が置かれた。盲部初等部（修業年限6年）の教科は，修身，国語，数学，歴史（5，6年），地理（5，6年），理科，唱歌，体操，手工，家事手芸及び裁縫（4年から女のみ）で構成された。中学部（修業年限4年）鍼按科には，初等部の教科以外に英語，医学要項，鍼按実習が加わった（手工はなし）。音楽科には，同じく英語，音楽理論，音楽実習が加わった。別科は修業年限2年で，修身，国語，数学，唱歌，体操，家事手芸及び裁縫，医学要項，鍼按実習の教科が課された。

聾啞部初等部には，修身，国語，数学，歴史（5，6年），地理（5，6年），理科（4，5，6年），図書，手工及び技芸，唱歌及び体操の教科が設けられた。中学部（修業年限5年）工芸科初等部の教科に加えて工芸（手工及び技芸はなし）が置かれた。裁縫科では初等部科目の内，手工及び技芸がなくなり，裁縫，家事（女のみ）が設けられた⁴¹⁾。

3) 生徒数の推移と卒業生の状況

1931（昭和6）年に認可を受けた後の生徒数は「青森県統計書」に掲載されているが，表2は，私立青森盲啞学校時代の生徒数の推移を整理したものである。認可された年には生徒総数35名であったが，県立校となった1937（昭和12）年には，53名に増加した。

認可後1944年度までの卒業生の状況は表3に示した通りである。1944年度までの中等部卒業生総数は，盲部が34名，聾啞部も34名であった。盲部卒業生の大半は三療に従事し，聾啞部卒業生のほとんどが大工，左官，裁縫，農業等に職を得た⁴²⁾。

表2. 私立青森盲啞学校時代の生徒数

	盲 部				聾 啞 部				総数	
	初等部		中等部 鍼灸科		初等部		中等部			
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
1931 (昭和 6)	5 ・4	3 ・5	4 ・2	1 ・0	4 0	5 ・2	— —	— —	13 ・6	9 ・7
1932*) (昭和 7)	6 ・3	1 ・3	4 ・3	4 ・2	11 ・0	6 ・0	— —	— —	21 ・6	11 ・5
1933 (昭和 8)	4 ・6	5 ・1	3 ・3	3 ・2	13 ・0	9 ・0	— —	— —	20 ・9	17 ・3
1934 (昭和 9)	9 ・0	5 ・0	3 ・3	4 ・2	16 ・0	11 ・1	— —	— —	28 ・3	20 ・3
1935 (昭和10)	11 ・0	9 ・0	5 ・1	6 ・0	18 ・2	12 ・2	— —	— —	34 ・3	27 ・2
1937 (昭和12)	3 ・1	4 ・2	0 ・6	0 ・2	19 ・0	14 ・2	0 ・1	0 ・3	22 ・7	18 ・6

(「青森県統計書」より作成)

*)聾啞部初等部生徒数は原資料では学齡外となっているが、前後の年度の生徒数から推察して学齡児数であると考えられるので、学齡児として集計した。

表3. 認可後の卒業生

	盲 部		聾 啞 部	
	初等部	中等部	初等部	中等部
1931 (昭和6)	3		3	
1932 (昭和7)	2		2	
1933 (昭和8)		4		4
1934 (昭和9)		2		2
1935 (昭和10)		2		2
1936 (昭和11)	3	2	3	2
1937 (昭和12)	1	1	1	1
1938 (昭和13)	2	2	2	2
1939 (昭和14)		2		2
1940 (昭和15)		7		7
1941 (昭和16)	1	2	1	2
1942 (昭和17)	2	3	2	3
1943 (昭和18)		4		4
1944 (昭和19)	4	3	4	3

(青森県立青森盲学校・青森県立青森聾学校：昭和26年度学校一覧より作成)

おわりに

青森盲啞学校は、明治末期から昭和初期にかけて県内で組織された社会事業の一つとして、献身的な盲人によって始められた。青森盲啞学校の前身である盲人教育所は、盲人保護に理解ある一部の資産家、政治家の支持、援助を得ながら発展することができた。盲啞学校の県立への移管は、県内での盲啞教育への理解の広がり、一部の資産家、政治家の運動、さらには盲学校及び聾啞学校令にもとづく全国的な盲聾学校の県立移管化の動きが後盾となって可能となったと言える。

県立移管後は、私立校時代に比較すると経営面では憂いがなくなり、学科や教科も充実し、多数の卒業生を世に出し、青森県の県都に位置する盲聾啞児教育の拠点として発展を見せた。しかし、県立移管直後の日中全面戦争への突入、1941年の太平洋戦争開始など、日本は侵略戦争へと突進する時代にあり、盲学校教育もその影響から免れようもなかった。「実に八有余年、壮行会だ、時局展の見学だ、陸軍基地の清掃だ、あるいは武運長久だ、戦勝祈願だ、などとあらゆる機会をとらえて、各種の施設を通して直覚、直感により時局認識に努めてきた。更には、陸軍病院を慰問しては、戦病者に対しあんま、マッサージの奉仕、又は理髪の奉仕を行うなど、結局認識を深めると共に奉公の一端を捧げたものだ」⁴³⁾と言われる状況であった。1945年7月28日の青森空襲は、幾多の教材・教具、按摩、鍼などの器具、機械と共に、青森盲学校校舎を一夜にして灰塵と化した。幸い、児童・生徒は空襲の十日前に帰宅させていたため、教職員を含めて犠牲者はなく、これらの教職員、児童・生徒を通して、戦前の盲啞学校教育の遺産は大戦後に継承されることとなった。

(注)

- 1) 安藤房治：青森県障害児教育史－盲・聾教育の創始と八戸盲啞学校の設立－，弘前大学教育学部紀要，第51号，1984。
- 2) 安藤房治：戦前青森県における障害者の生活実態，弘前大学教育学部紀要，第54号，1985。
- 3) 工藤大成：県立盲聾学校設立の急務，青森県教育，195号，10頁，1930。
- 4) たとえば，孤児貧児虚弱児保護事業としては東北育児院（明治35年），青森同情園（同33年），八戸保嬰学校（同35年），保育事業としては弘前託児園（大正3年），青森保育園（同10年）。その他，昭和初期には農村託児所の設立が相次いだ。
- 5) 青森県庁社会課，青森県社会事業要覧，41頁。（発行年は不明であるが，昭和5年までの記述があることから，発行は昭和6年頃であると考えられる）
- 6) 東京盲学校卒業式，帝国盲教育，第3巻第4号，116頁。
- 7) 「（西蓮寺は）東京盲学校の師範部へ進学しました。そこで青森出身の盲学生奈良孝治と知り合いました。やがて奈良は，自分の信念を幸三郎に伝えました。『青森市は政治，文化，産業そして交通の中心地であるが，盲学校がないから，盲学校を建設し，社会福祉の発展に身をささげることが自分の人生であり，人生の目的である。しかし，残念なことに，自分は健康に自信がないが，君が力を貸してくれるならば，この夢は達成するんだがなあ』いつしか，ふたりは手を取りあい，その夢を実現するために固い約束をしていました。」（青森県児童文学研究会：青森県を築いた人たち，139，140頁，1975。）
- 8) 青森県児童文学研究会：青森県を築いた人たち，140，1975。「青森県立青森盲ろう学校：創立三十年誌」では，この間の経緯について以下のように記述している（9頁）。
「北海道旭川の盲学校に発令され赴任すべく出発したのだが，途中立寄った青森に，まだそれらしい学校のないことを聞き，旭川の方を辞任し，単身此の地に引返して，借家住いをしながら青森盲人教育所の設立をした」
- 9) 青森県児童文学研究会：同書，140頁。
- 10) 成田繁七：みちのく聖女物語－愛に生きぬく四十年－盲啞教育の先達山口ちせ先生をしのんで，東青教育界の先覚者刊行委員会，雪のごとく輝く，268頁，1969年
- 11) 同書，270頁。
- 12) 同書，271頁。
- 13) 青森県立青森盲啞学校：学校一覧，1頁。発行年月不明であるが，「沿革概要」に昭和十二年七月「県立移管祝賀式挙行事」までの記載があることから，県立移管後に発行されたと思われる。
- 14) 青森県立盲ろう学校：創立三十年誌，9頁，1955。
- 15) 「東奥日報」昭和4年11月29日付（青森県教育史第4巻，641頁）。
- 16) 青森県立盲ろう学校：前掲書，10頁。このような啓蒙活動は，青森盲人教育所のみならず行われていた。八戸盲人学校では「生徒募集のために木村同校教諭は一日西郡鰺ヶ沢へ二日五所川原へ引続弘前，黒石等各地を巡り，日頃本市を訪れ青森師範学校で一般に内容を説明し種々援助を求める筈」（『東奥日報』1927・3・1付）という状況であった。
- 17) 同書10頁。
- 18) 藤林源右衛門(1869～1956)。当時市会議員，青森銀行取締役などをつとめ，1933年から青森商工会議所会頭を三期つとめた。（青森県人名大辞典，1969）
- 19) 『東奥日報』1928・1・19付（青森県教育史，第四巻，603頁）。
- 20) 1928（昭和3）年1月当時，政府事業労働者（男）の平均年収が1011円05銭，一般工業労働者（男）が，829円28銭であった。（実収賃金・日給に365日を乗じて算出した。朝日新聞社：日本経済統計総観，947，950頁，1930）
- 21) 根川貞美：母校の生い立ちを回顧して，青森県立青森盲ろう学校：創立三十年誌，68頁，1955年。
- 22) 青森県人名大辞典，261頁。
- 23) 成田繁七：前掲書，273頁。
- 24) 同書：273頁。
- 25) 『東奥日報』1928・1・19（青森県教育史，第四巻，604頁。）

- 26) 青森県教育史，第四巻，640頁。
 27) 青森県立青森盲啞学校：前掲書，1頁。
 28) 北山一郎（1870～1949）。1900（明治30）年から4期県会議員，衆議院議員を歴任。1930（昭和5）年に青森市長に当選（青森県人名大事典）。青森盲人教育所創設者西蓮寺の亡き後，運営，教育活動を継承した一人である山口ちせは，北山一郎の選挙演説において「盲啞教育は全県的に推進させねばならない」との主張を街頭で耳に，北山に支援を依頼した（成田繁七：前掲書，274頁。）
 29) 青森県告示第124号，青森県報・昭和8年度，131～132頁。
 30) 青森県立青森盲ろう学校：前掲書，13頁。
 31) 『東奥日報』1930・10・27付（青森県教育史，第四巻，664～665頁。）
 32) 同書，665頁。
 33) 『東奥日報』1931・11・17付（青森県教育史，第四巻，733頁。）
 34) 八戸盲学校からの陳情等は以下の通り。

	請 願 ・ 陳 情	請願・陳情者
1927（昭2）年	私立八戸盲学校補助金増額請願	八戸盲学校長
1932（昭7）年	県立代用私立八戸盲啞学校県移管方請願	八戸盲啞学校長 同校維持会長
1935（昭10）年	八戸盲啞学校県移管陳情	八戸盲啞学校長 同維持会長 青森県町村会長 外二郡分会長

（青森県議会史・自昭和元年至昭和10年，より作成）

- 35) 青森県議会史・自昭和元年至昭和10年，1583～1584頁。
 36) 東奥日報，1937年4月9日付。
 37) 青森県立青森盲啞学校：前掲書，4頁。
 38) 青森県立盲啞学校：青森県立青森盲啞学校規則，1頁，1942。
 39) 盲学校及聾啞学校令第1条は以下の通りである。
 「盲学校は盲人に，聾啞学校は聾啞者に普通教育を施し其の生活に須要なる特殊の知識技能を授くるを以て目的とし特に国民道德の涵養に力むべきものとす」
 40) 青森県立盲啞学校：学校一覧，12頁。
 41) 同前書，5～8頁。
 42) 1950（昭和25）年度までの卒業生は，盲部中等部（盲学校中学部）が45名であり，聾啞部（聾学校中学部）も45名であったが，それぞれの進路は以下のようであった。

盲部（盲学校）		聾啞部（聾学校）	
自宅開業	33名	理容師開業	2名
学校教師	3名	理容師弟子入り	2名
弟子入り	2名	大工	3名
病院に勤務	5名	左官	2名
		裁縫	7名
		農業	5名
		建具家具	3名
		洗濯業	1名
		手工業	3名
		昼職	1名
		其の他家事手伝い	16名

（青森県立青森盲学校・青森県立青森聾学校：昭和26年度学校一覧，18～19頁）

- 43) 青森県立青森盲ろう学校：前掲書，16～17頁。